

D. H. Lawrence : 小説に現われた女性 (その5)

— *The Plumed Serpent* を中心に —

石 田 美 栄

I

Women in Love の Birkin 以来の主張である、男と女の結びつきに加えて男性同士の結合の重要性と必要性が、女性を見捨てあるいは隔離することによって、イギリス、イタリア、オーストラリアへと場所を移して、*Aaron's Rod, Kangaroo* と追求され続けてきた。しかし「愛の予言者」ロレンスが女性を避けることによって、男性優位の主張のために「暗黒の神」の思想を必死に模索してみても、それは本領逸脱による無理な話しであった。そして *Aaron's Rod* における “And men must submit to the greater soul in a man, for their guidance: and women must submit to the positive power-soul in man, for their being.”¹ という主張は、*The Plumed Serpent* において、ヨーロッパ文明から離れてインディアンの中で、キリスト教を破壊してメキシコの原始宗教を復活させる活動において、一応成し遂げられる。またそれは *Women in Love* における、ロレンスの女性観の行き止りからここに至っては、完全なる女性の否定・女性の自我と魂の抹殺となるわけである。

「愛の予言者」ロレンスとしては、女性を排除したのでは目的を達することができない。女性に納得させることができこそ意味があり、自由意志で従わせなければならないのである。従って *The Plumed Serpent* は終始女性を主人公としているが、それは男性世界に圧倒され、屈服させられる女性世界としてである。人間性を越えた、超越的な男同士の結びつき、団結が成立し、ヨーロッパ女性の自我はこれに対抗できず、すべて黙認する。ここに、長い長い男女の相剋は終焉をとげ、男性世界の勝利が歌われるわけである — “*The Plumed Serpent* was the last manifestation of a ten years' dream.”²

こんなわけで、ロレンスは *The Plumed Serpent* を “my most important novel” と手紙の中で繰り返しており、1925年6月23日、Curtis Brown に宛てた手紙では次のように述べている。

I had thought that perhaps I would do a third long story, to go with 'The Woman Who Rode Away' and 'The Princess', and make a vol. for America. . . .

I consider this my most important novel, so far.³

また同年10月 Martin Secker には “I still say, this is the most important of all my novels. But I hate sending it out into the world.”⁴ と書き送り、Carl Seeling には “. . .

Women in Love. This, with *The Rainbow* and *Sons and Lovers*, I like best of my books.”⁵ Alfred A. Knopf にもまた “I still think it is my most important novel: . . .”⁶

と書き送っている。

それでは、何故ロレンスにとって *The Plumed Serpent* は最も重要な小説であったのか。この作品は1923年5月初めにメキシコを訪れた時に書き始められてから中断されていたものが、1925年初め二度目のメキシコ訪問で完成され、1926年1月に出版された。その中断の理由は、妻のフリーダが一人でヨーロッパへ発って行ったためであった。ロレンスとフリーダの間には絶えず強い自我のぶつかりあいがあり、ロレンスがいかに服従を求めても、フリーダはがんとしてそれを拒否し、絶対に従うものではなかった。この時の両者の喧嘩は最も烈しいもので、フリーダは二人の間のすべてが終ったと思う程であった。その時の二人の事情を R. Aldington は次のように説明している。

There was nothing she could do at that point but either insist on going home or become what she had so long fought against. So Lawrence had to let her go, but his obstinacy made him prefer to let her go alone. It remained to be seen which would get lonely first, and he was quite confident that she would return to him wherever he was; and that would be a victory for him. . . . that the separation from Frieda made him "restless and in a lonely mood."⁷

ヨーロッパに帰ったフリーダは、子供たちや母親や友人たちに再会して、結構楽しい日々を送り、ロレンスの方が淋しくなり、苛立って、結局フリーダとの別れに耐えられず、フリーダの後を追ってロンドンにやって来た。すなわちそれは、勝利どころか、ロレンスが負け犬であった。このような状況のもとに書かれた *The Plumed Serpent* をロレンスが好きな作品ではないが、最も重要な作品だと繰り返すのは、男性優位と女性の服従を求め続けたロレンスの男としての強いエゴイズムを、この作品において一応結実させているからである。

女性の絶対服従は成し遂げられたがそれは反面女性の自我と魂を抹殺し、性の喜びさえも否定することであった。さらに、死は作品全体に遍在し、20人以上の死、それも大部分は殺害であって、“The Morning Star”の主張にもかかわらず、死の影に覆われたものになっている。

II

前作の *Aaron's Rod* や *Kangaroo* とは全く様子を異にして、*The Plumed Serpent* では一人の女性 Kate がヒロインで物語は進められ、「ヨーロッパの教養と自我を身につけた彼女がどのように変化して行くかはこの作品の主題である。」⁸ 40才の Kate はヨーロッパ的な意味での人生はもう味ってすんだ、ヨーロッパ文明 (England, husbands, Mother, children) から離れて、“something infinitely intangible”⁹ を求めて、メキシコインディアンの中に現われる。だが Kate は原住民の残酷さに耐え難さを感じるのであるが、Don Ramon とのやりとりの中で新しい自己発見に対する何らかの可能性を期待して、メキシコに留ることにする。Ramon は liberty などない、“All we can do is to choose our master.” (p.79) だといい、二人はお互に “my own manhood”, “my own womanhood” (p.81) を主張する。すなわち、この小説の主題提起である。

次に、Ramon の妻である Dona Carlota の目を通して Don Cipriano が Kate の前に引き出され、また Don Ramon が紹介される。その Carlota 自身は敬虔なカトリック信者であり、

慈善事業に熱心な女性で、すなわちヨーロッパ女性の一つのタイプである。そうした Carlota と Kate との間に交わされる男性観は pride, vanity, power, worshipped を求める “a little boy who needs a nurse and a mother”(p.176) である。そして Don Ramon と Dona Carlota の関係において、従来の両性関係、特に Carlota の中にそれまでのロレンスの女性観であるヨーロッパ女性が批判される。

. . . , ‘you do not love, save with your will. I don’t like the love you have for your god: it is an assertion of your own will. I don’t like the love you have for me: it is the same. I don’t like the love you have for your children.

. . .

You do *not* love them, you are only putting your love-will over them. . . .

(p.220-1)

従来の両性関係の love は喪失し、Carlota には全々理解できない Ramon の求める世界が展開されてゆく。

他方 Kate 対 Ramon, Cipriano の関係では、“These two men wanted to take her *will* away from her, as if they wanted to deny her the light of day.” (p.197) という中で、“the power to compel” という考えが主張され、それは “It makes me very happy, when I know I can’t escape.” (p.217) という風に Kate に受け止められて、Ramon と Kate の間にある種の共感が成り立つ。そしていよいよ *Aaron’s Rod* において Lily が説いた暗黒の神を通じての優者への服従と偉大な男性に対する女性の服従、さらに *Kangaroo* では実現できなかった男性同士の結合が実現されてゆくのである。ここでは暗黒の神に代って “the Morning Star” で表現され、現実にはメキシコの原始宗教の復活 Quetzalcoatl (Plumed Serpent) で象徴されるものを通して男性同士の結合が進められてゆく。その中で、キリスト教・ヨーロッパ文明による支配が拒絶され、すべてが破壊されて—‘Jesus’ Farewell’ の讚美歌 (p.293) であり、“Their days are over in Mexico.”(p.294)—それに代わる Quetzalcoatl 復活運動を通して、Kate, Cipriano, Ramon の三人の役割は *must* で結ばれ、Kate は Cipriano に仕え、Cipriano は Ramon にという関係が成り立つ。Cipriano と Ramon の男同士の団結は Cipriano のいう “To me Ramon is more than life. More than life.” (p.323), “I am Ramon’s Man.” (p.327) である。Chapter XX Marriage by Quetzalcoatl 以降、Kate (ヨーロッパ女性) の変革を中心にみてゆきたい。

Kate はアメリカにやって来る以前は、ロレンスがそれまでの作品のいたるところで描き続けてきた、自我の強い支配的な女性であっただろう。しかし *The Rainbow* の Anna Lensky や Ursula, *Women in Love* の Hermione, そして *Aaron’s Rod* の Lotty や Fanny, *Kangaroo* の Harriet といったそれまでの女主人公たちのような強い自我の主張は、ここではもううかがえない。そしてさらに、*Women in Love*, *Aaron’s Rod*, *Kangaroo* で果せなかった女性の自我を取り去るという表現が Marriage by Quetzalcoatl の章で繰返され、同時に魂をも奪ってゆく過程が描かれる。

Because in reality her soul and spirit were gone, . . . (p.320)

Her self had abandoned her, and all day was gone. (p.326)

She fused into a molten unconsciousness, her will, her very self gone, . . . (p.334)

こうした自我と魂の抹殺と平行して a little flame が次第にはっきりとしてくるのだが、それは受身的なものの服従ということに外ならない。

Nothing to do but to submit, and wait. (p.321)

But wait, wait, wait, the new blood would come. (p.321)

. . . , casting the old, twilight Pan-power over her, she felt submitting, succumbing. (p.335)

結婚とは両性関係とは、それまでの相剋のうちにも star equilibrium, freedom together の理想をかかげたものとは全く異なる受身的な服従である。

She could conceive now her marriage with Cipriano; the supreme passivity, . . . the sheer solid mystery of passivity. (p.325)

他方 Ramon の妻 Carlote は自らの主張を変えない (ヨーロッパ女性の自我, 知性, 宗教) たため、死に追いやられる。死にかけの Carlota に対する Ramon, Cipriano の反応は冷酷で、Kate もまた冷笑的な面を見せる。Cipriano は死にかけている Carlota に“死ね”と繰り返す。

‘. . . Oh! — die! — die! Die and be a thousand times dead! Do nothing but utterly die!’ (p.363)

Kate にしても棄て去ったはずのヨーロッパの女, 文明化した女, 解放された女の主張と疑問が自ずと湧いてきて、服従によって生きる道に突き進むことに迷う。その迷う Kate を男性 (ロレンス) のエゴイズムは様々の手段を用いて納得させ、屈服させてゆく。Cipriano が反逆者たちを刺し殺す残酷な光景によって Kate を威圧し、individualism を否定し、Ramon の後妻の Teresa (the new woman in his imagination)¹⁰ を登場させることによって、“And the togetherness needed a balance. Surely needed balance!” (p.414) “Her life was her own!” (p.415) “The room of a woman who lived her own life, for her own life.” (p.416) と考える Kate に異った両性関係を見せつける。すなわち Teresa にロレンスの主張を次のように語らせ、Kate を説得させる。

It is not simply love, . . . my soul is with Ramon. (p.424)

He is my life. (p.425)

I ever knew he needed my soul. . . . I have lost my soul to Ramon. (p.425)

Kate の意識の中ではヨーロッパ的なものと原始的なものとの葛藤が続き、逃げ出さなければとも思うが、ヨーロッパ女性を変革してロレンス願望の女を創り出す努力が執拗に続けられる。Kate は “the intrinsic superiority of the hereditary aristocrat”, “But Kate had always looked upon her blood as absolutely her own, her individual own.” (p.433) と考えるが、“Blood is one blood. We are all of one blood stream.” “In the blood, you and I are undifferentiated.” (p.433) という考えに結局は納得させられる。

It was the renewal of the old, terrible bond of the blood-unison of man. . . .
The blood of the individual is given back to the great blood-being, the god,
the nation, the tribe.

Now she understood strange unison she could always feel between
Ramon and his men, and Cipriano and his men. It was the soft, quaking,
deep communion of blood-oneness. Sometimes it made her sick. Sometimes
it made her revolt. But it was the power she could not get beyond. (p.434)

これは *Women in Love* の Ursula, *Aaron's Rod* の Fanny, *Kangaroo* の Harriet にも分らせることのできなかつた超越的な男同士の団結, 男性優位の主張である。それでもまだ *duality two selves* が消えてしまわない Kate に性の恍惚までも否定し, 性の喜びを味わうことも男性の支配下にあることを納得させる。

But Cipriano would not. By a dark powerful instinct he drew away from
her as soon as this desire rose again in her, for the white ecstasy of
frictional satisfaction, the throes of Aphrodite of the foam. She could see
that to him, it was repulsive. He just removed himself, dark and unchangeable,
away from her. (p.439)

さらに知ることも感情も否定されて, Kate は「¹¹我の主張ではなくて, 服従によって生きる道を見つけたのである。」

Now she found herself accepting him finally. . . . mindless communication
of the blood. (p.440)

'I am like Teresa, really,' she said to herself. (p.441)

This again gave her a feeling of helplessness, a woman's utter helplessness
with a man who goes out to the beyond. (p.444)

ここまできて最後の章で, Kate の *two selves*, *duplicity* がもう一度明確にまとめられて, クリスマスに間に合うようにイギリスに帰れると思ひ, 出発の手筈を整えたが, "You needn't commit yourself to us. Listen to your own best desire." (p.461) といわれても, 結局 "You won't let me go!" (p.462) で終わっているということは, 一応納得のうで自由意思で「服従」によって生きる道に留ったということになるのであろう。

III

ロレンスは「いわば彼の人生の連続物語を書きうつしている。¹²」のであって, その中で *The Plumed Serpent* を特に "the most important novel" と繰返していることは意味深いことである。すなわちあらゆる手段を用いて女性を否定し, 自我も魂も抹殺し, 男同士の団結を実現し, それを女性に納得させて, 性の喜びまでも男性の支配下にあることを示すことによって, 遂に男性優位の主張を達成した。こうした結末は, 執筆当時のフリーダとの伝記的事実を思い合わせる時, ロレンスにとって悲願達成であったといわざるをえない。それ故にロレンスをし

て世に出したくないが、最も重要な作品といわしめ、". . . then he is engaged (even though unconsciously) in taking revenge on the Woman by degrading her."¹³ なのであった。

だが、しかし、フリーダに去られた淋しさの中でも、フリーダの母親へ宛てた手紙の中で次のように述べている。

. . . that a man doesn't want, doesn't ask for love from his wife, but for strength, strength, strength. To fight, to fight, to fight, and to fight again. And one needs courage and strength and weapons. . . . Give me strength, battle-strength, weapon-strength, fighting-strength, give me this, you woman!¹⁴

ロレンスが "Woman would yield their beings completely into the care of men."¹⁵ のような結末に心から満足することができたであろうか。また「愈し難いほどイギリス的」なロレンスが、インディアン¹⁶の古い信仰をメキシコに蘇らせることよっての優者への服従、男性世界の実現、男性優位の実現に心から満足することができたであろうか。さらにまた白人女性の Kate にメキシコ女性の Teresa を見習わせることに心から満足できたであろうか。ロレンスの男としての強いエゴイズム追求は、人間性や性の成就までも否定して際果てにまできて、変化せざるを得なかったといえる。

ここで、再び Charles Rossman の言を借りてみたい。

Then, after *The Plumed Serpent*, Lawrence explicitly rejects power and primitivism and turns once again to the sexual union between man and woman, tenderly and compassionately consummated, as the center of the individual's life.¹⁷

ロレンスのこうした変化は、*Phoenix* 中の "Love, Sex, Men and Women" (We Need One Another) でもはっきりと述べられている。すなわち、人間には二つの偉大な関係、男女の関係と男同士の関係、が可能であり、"But the relationship of man to woman is the central fact in actual human life. Next comes the relationship of man to man."¹⁸ さらに、男女関係をもっと温い、優しさのある広い視野でとらえ論述している。

The Plumed Serpent を書いて三年後、*The Lady Chatterley's Lover* 執筆中に Witter Bynner に宛てた手紙では、"Tenderness is a sentiment that is conspicuously lacking in *The Plumed Serpent*, . . ." ¹⁹ から優しさを主題にした作品への変化を明白に述べている。

. . . , the leader-cum-follower relationship is a bore. And the new relationship will be some sort of tenderness, sensitive, between men and men and men and women, and not the one up down, lead on I follow, *ich dien* sort of business. So you see I'm becoming a lamb at last, and you'll even find it hard to take umbrage at me.²⁰

それは、人格も自我も性の喜びも捨てさせられた女性 Kate が、ある意味ではそのまま *nothing of life, meaningless of life, death* の世界の Connie として登場し、ロレンスの考えた新しい方向での女性の復活、そして男女関係の本質、理想が描かれることになる。

Notes

1. D. H. Lawrence, *Aaron's Rod* (London : Heinemann, 1963), p.289.
2. Harry T. Moore, *The Life and Works of D. H. Lawrence* (London : George Allen & Unwin, 1951) p. 237.
3. Harry T. Moore, ed., *The Collected Letters of D. H. Lawrence* (London : Heinemann, 1970), II, p.845.
4. *Ibid.*, p. 859.
5. *Ibid.*
6. *Ibid.*, p. 860.
7. Richard Aldington, *Portrait of a Genius, But . . .* (London : Heinemann, 1950), p.277.
8. 倉持三郎「ロレンス 愛の予言者」(冬樹社, 1978), p.177.
9. D. H. Lawrence, *The Plumed Serpent* (Penguin Books, 1961), p.65-6. 以後同書からの引用はページ数を本文中に記す。
10. J. Middleton Murry, *D. H. Lawrence : Son of Woman* (London : Jonathan Cape, 1954), p.304.
11. 倉持三郎, *op. cit.*, p.177.
12. ウォルター・アレン, 渥美昭夫・桂子訳「20世紀英米小説論」 鹿島出版会, 1967, p.37.
13. Murry, *op. cit.*, p.305.
14. *The Collected Letters*, II, p.763-4.
15. Charles Rossman, "You are the call and I am the answer : D. H. Lawrence and Women," *The D. H. Lawrence Review* Vol. 8, No. 3 (1975), p.302.
16. アレン, *op. cit.*, p. 37.
17. Rossman, *op. cit.*, p.305.
18. Edward P. McDonald, ed., *Phoenix : The Posthumous Papers of D. H. Lawrence* (Penguin Books, 1978), p.193.
19. Graham Hough, *The Dark Sun : A Study of D. H. Lawrence* (London : Duckworth, 1975), p.149.
20. *The Collected Letters*. II, p.1045.